

アトモスフィア

思いこみ

上田 國寛*

一冊の本との出会いから一生を決めるほどの影響を受けることがある。私の場合、それは小学校4～5年生の頃（1950年か51年）に読んだ池田宣政著「野口英世」（ポプラ社）である。子供向きの伝記で、冒険小説のジャンルでは南 洋一郎の名で知られた著者が戦前に手がけた作品（の改訂版）だったが、描写は流麗で力強かった。冒頭に清作少年が小魚を売りながら猪苗代の町に行く情景は今も頭のどこかで影絵のように揺れている。この本を読み終えた時、自分も将来基礎医学をやりたいと思った。終戦後数年の日本では季節毎に伝染病が多く、細菌学者「野口英世」の名は多分に脚色された立志伝によって国民的英雄の響きをもっていた。

この時の思いは私の中で変わることなく、大学は医学部に、大学院は基礎医学（医化学）に進んだ。人生ではまた、昔の知り合いに何年後かにひょっこり出くわすことがある。私が野口英世と再会したのは大学院1回生の夏、研究テーマである「第三の核酸」[ポリ(ADP-リボース)]の分解酵素（ホスホジエステラーゼ）を調べるため、蛇毒の文献を求めて医学図書館に行った時である。書庫で古いジャーナルをあこれ調べるうちに、蛇毒の溶血作用を扱った J. Exp. Med. の論文に行き当たった。1901～5年（合巻だった）にこんな研究をやっていたんだと思いながら著者名を見ると BY SIMON FLEXNER, M.D. AND HIDEYO NOGUCHI, M.D. とあった。おや、こんなところでお目にかかったと無性に懐かしかった。これを手がかりに野口博士が単独（あるいはフレクスナー博士と共著で）発表した論文をいくつか読んだが、音に聞く猛烈ぶりを偲ばせる無数の実験がある一方、条件の選び方がしばしば総花的（手当たり次第）で、結果の解釈が一部主観的であることに気付いた。対照（ポジティブ/ネガティブコントロール）を欠く実験もあった。当時野口博士はロックフェラー研究所で本格的に研究をはじめて間がなく、初心者のがさがあつて当然かもしれないが、厳しい初期指導を受けなかった様子が伺われた。

数年後、留学目前の1974年秋、私は自分をこの道に導いてくれた恩人に会いたくなり、仙台の学会からの帰途、猪苗代湖畔に博士の生家を訪ねた。澄み切った秋空の下、磐梯山が大きく裾野を引く一帯は美しく実った稲穂で文字通り黄金の海であった。その中に生家は、忘れられたように建っていた。博士が郷里を発つ時柱に刻んだという「志を果たさずんば…」の文字が静かに私を励ましてくれた。

その後も折々に、多くの伝記や解説記事を読み、野口博士の社会人としての、また科学者としてのの人となり、その業績や評価について概略を知るところとなった。実像はなお不明な部分を残すが、業績として進行性麻痺と脊髄癆の患者の脳脊髄中に梅毒スピロヘータを発見したことは世界的評価を確立している。一方、梅毒スピロヘータの（毒性を保ったままの）純培養や黄熱病“菌”の発見は誤りであったと今日考えられている。なぜこのようなミスをおこなうに至ったかについては、いろいろ理由が挙げられるが、結論的には当時すでに病原体同定の鉄則となっていたコッホの三原則を完全に満たさないまま、自己の判断を信じて突き進んだ面が否定できない。コッホの三原則は病気と病原体の因果関係を確定するための手続き（この種の研究における対照と確認の方法）を示したものである。前述の蛇毒の実験に照らしてみると、野口博士が研究者となる前後に正規のトレーニングを受けず、米国で師事したフレクスナーもよき教育者でなかったらしい結果、しゃにむに研究を進める傍ら、偶然見られた（あるいは見たと思った）ポジティブな結果だけを拾い出して自説を組み立てる「キワドキ奴」（博士自称）になったことが考えられる。

最近韓国と日本で相次いで研究成果の発表に関し、ミスコンダクトがあつたと報じられている。輝かしい成果が全くのメイキングだったとは信じ難く、私はそれに近い結果やそれに迫る技術があつたと信じる方だが、唯、強い思い込みや周囲の期待が幻想を現実に見誤らせた可能性はあるように思う。目前の実験の結果がこうあつてほしいと期待する（祈る）ことは研究者なら誰も二度や三度経験している。しかし、ほとんどの場合、結果は無惨にも否定的である。その残念な結果を自らに受け入れさせてくれるものは、厳密な対照実験と確認実験である。このペアはいかなる研究においても、結果の信頼性を保証する拠り所として欠くべからざるものであり、これを忘れないことを研究者は出発点とすべきであろう。

*京都大学名誉教授、本会参与